

みんなで
考えよう
人権・同和問題
No. 227

外国人も日本人も

このコーナーは、隔月のシリーズで掲載しています。これを手がかりに、家庭で人権・同和問題について話し合ってみましょう。

東日本大震災の直後、被災地では「外国人による犯罪が横行している」というデマが流れ、住民の多くがそれを信じたといえます。ある調査によると、うわさを聞いた住民のうち8割以上の人が事実だと思いついてしまったとのことでした。歴史的に見ても、大災害などの混乱時には外国人犯罪のデマが生じるケースが多く、大正時代に発生した関東大震災では、「井戸に毒を入れた」というデマを信じた人々が、多数の外国人を虐殺

したという痛ましい事件も起きています。もしかしたら私たちの心の中には、無意識ながら外国人に対する偏見が存在していて、冷静な判断ができない状況のとき、それが表面化するのかもしれない。

そのような中、昨年4月に大地震が発生した熊本県では、外国人との絆を感じさせる出来事がありました。人々を結びつけたのは、支援物資として提供された400食の『ハラル弁当』。豚肉やアルコールを使用しないなど、イスラム教の戒律にしたがって調理された弁当です。熊本市のホ

テルの料理支配人が支援を申し出たもので、イスラム圏からの留学生や労働者など多くの人に、とても喜ばれたとのことでした。食事に困っていた彼らが満たされたのは、胃袋だけではないはず。

外国人は、言葉の壁や習慣の違いなどから、災害時に的確な行動ができていくものではありません。熊本での出来事は、孤立しがちな外国人への支援の必要性にいち早く気づき、実際の行動に移したすばらしい事例ではないでしょうか。避難所では、イスラム圏の人たちがカレーなどを作り、多くの避難住民にふるまったとも言われています。私たちは一人では生きていきません。多様な人々に支えられて生きていることを忘れずにいたいですね。

市社会教育研究大会が4年ぶりに開催

1月29日、立花公民館で『地域創生は、公民館から』をテーマに市社会教育研究大会が開催されました。『子どもを育てる地域創生』と題して上野景三さん(佐賀大学大学院教授)が講演し、子どもたちが戻ってこられる地域づくりの大切さを訴えました。そのあと、大

川内町・牧島地区・黒川町・二里町による『子ども伊万里塾』の実践発表があり、夏休みを活用したサマースクールの実践や課題などを報告しました。また、子ども観光ガイド育成講座に参加した児童たちが、大川内山や伊万里焼についてガイドを披露しました。



↑ 11回の講座を受講し、子ども観光ガイドとしての成果を発表する児童

郷土の文化財

● 問合先 生涯学習課文化財係
(☎ 23186)

伊万里地域の磁器の始まり(後編)

今回は、伊万里市内の旧唐津藩領(波多津町・黒川町・南波多町・大川町)での磁器生産の始まりを紹介します。

唐津藩での磁器生産という少し想像しにくいかもしれませんが、大川町にある梅坂窯跡と東田代筒江窯跡の発掘調査で、磁器を生産していたことが確認されています。1630年代の頃の二つの窯跡では、もともと、甕(かめ)やすり鉢、皿などの陶器製品を焼成して、磁器製品も一緒に焼き始めました。

佐賀藩は、窯場の整理統合により、陶器と磁器を一緒に焼いていた窯を廃業させ、磁器のみを生産する窯を優先して保護しました。梅坂窯跡と東田代筒江窯

跡は唐津藩のため、この整理統合には影響されてはいませんが、磁器生産が短期間で終わっています。これは、唐津藩領内に磁器生産の原材料となる陶石が豊富に産出しなかったためと思われる。発掘された磁器片の断面を見ると、泉山の陶石を使った製品とは違うようです。唐津藩での磁器生産に使われた陶石はどこで採掘されたのか、まだ分かっていません。



↑ 窯跡から出土した磁器片
(上段) 梅坂窯跡、(下段) 筒江窯跡